

下市 深谷方面昆虫採集記

坪 田 義 正

昨年は高原昆虫の採集会を催したが、本年は観衆を変えて、小中学生徒児童がより多く参加し易く、又一般的な昆虫の生態形態を理解させ、学校における理科教育の一助として時に福井市内の地を選ぶ。

燦々と輝く真夏の太陽のもとに、8月4日東安宿小学校々庭に集合く蛇行せる道を下市にと出発する。総員26名、従来行われてきた群集心理のもとに参加したメンバーと異り、毎年同じ顔が見られる事から察しても、固定した同好者が増加の一途をたどる事は喜ばしい。

直路上にて早速、採集意欲にみえる子供達はキチョウ、モンキチョウ、モンシロチョウ、シオカラトンボを、橋上にてキグテハを捕える。山麓の雑木林の日陰地帯で、カトリトンボ、オハグロトンボ、コシアキトンボ、ギンヤンマ、シオヤアブ、アオハダトンボ、ヒカゲチョウ、ツマジロウラジヤノメ、ゴミムシの採集にかかる。この辺一帯は第三期地層の化石地帯で小児童にも土地に明かるく、背後に迫る森林地帯は種々の食草の豊富は所として、時に福井市内でも類を異にし昆虫の種も多い。期待しておったマダラカマドウマの群棲する縦穴は埋められてしまっており、草むらに存在する数匹を発見したのみで、モンキアゲハの棲息地に向かう。西斜面はゴマヤハッカの栽培地であり、東面はムシ田圃に渡る田圃といった状態で、山林には、クズなどが自生している。ヒメウラナミジヤノメ、ゴマダラチョウ、スジグロチョウ、モンシロチョウ、アカグテハ、ミスジチョウ、コムシジチョウ、チョウトンボが多く見られ、花中に頭を入れてもがくコフキコガネの姿も又愛らしい。赤土の斜面ではハンミョウ、マメハンミョウが我々一行の先頭を行く、溪流に沿うて、ノシメトンボ、ギンヤンマ、キイトンボ、ウスバカゲロウ、シリアゲムシを採集し深谷部落の奥にて昼食をとる。

当处は本日の最終目的地であり、一面は竹林でそれを挟んで切り立つた山、他の一面は福井より鯖川に通じる簡術道である。

竹林ではヒグラシ、ニイニイゼミ、アブラゼミが静けさを破つて真夏の暑さを

いやが上にも添めている。この竹の密生地帯には幼児でも捕えることができる程数も多くあり、又案外低いところに止まっている。そればかりでなく我々の眼前をカラスアゲハ、クロアゲハ、モンキアゲハ、ウシアブ、ツチアブが入り乱れて大膽に飛び廻っており、当地方は採集者の未訪度も少い故か、足羽山とは違い随分衆に採集ができる。昼食を済ませた児童達は引平の教師と共に碇々として汗を流してそれらを追い、喉の乾きを清水で潤し、採集会の醍醐味を充分に味う。

同所において本日の指導者福井大学の堀口先生より各々同定をしていただき、各自活潑且つ食べる様は意欲を表わす。

午後2時頃帰路につき添谷地帯の郷社内でシマクトリガ、シリアゲムシ、タマムシ、カワゲラなどを採集する。“とんぼつり今日はおこまこいつたやら”。は昔の事。今の児童達には色も形も肥を圧すカラスアゲハ、モンキアゲハを追いその喚声がこだまする。

午後3時より光陽中学校にて、採集員の同定にかかる。珍種といわれるものは無いが、一般的な昆虫が数多く採れたことに依つて、本日の目的も果せた訳である。

引き続き昆虫の分類の仕方とその特徴の説明があつて、各自がその方法に随つてそれぞれ興味のもとに採集員を分類整理する。

一日の疲れも今日の現場学習によき指導者の御盡力で明日への資となることであらう。

鷹巣海岸生物採集記録

小 林 貞 七

7月に入つてもずっと低温続きで、小学校や中学校の臨海学習が取り止めになる天候異変で、かねて予定した27、28日の磯採集も困難ではないかと案じていた矢先、丁度この頃から天気も回復し真夏らしい暑さとなつて愁眉を開く。酒井博士を招いての臨海採集会も今年で3度目、1、2回は純いて敦賀湾での採集で大いに成績を挙げたが、今年は嶺北の参会者の便を考えて、鷹巣の磯を採集地と決めたわけ。来会者は高等学校の先生数名、小中学校の先生10数名それに、福井大学の学生、高等学校中学校の生徒を混えて40余名の頃合の採集会。

第1回は昼食を早めに済まして正午済会を出発、和布の磯に重地を喰色する。